
プロジェクト報告

国境を超える民族 —雲南省と新疆ウイグル自治区を事例として—

姚 玉 馨

第一章

中国は昔から多民族国家であり陸地が広く国境を接する周辺国も多い為、国境線も長い。歴史の発展に伴い、人々が往来し、民族は多数の国に居住するようになった。このように越境民族があらわれた。

中国の越境民族状況は複雑である。北部の黒竜江、内モンゴルから、北西部の甘肅、新疆を越え、南西部のチベット、雲南、南東部の広西まで、陸地の国境地帯に多くの越境民族が居住している。中国では、朝鮮族、カザフ族、ウイグル族、回族、ハニ族、チンポー族など約30ほどの6600万人の越境民族が存在している。越境民族の人数が多ければ多いほど、国境を超えて移動したり、国境外の同民族と連携したりする機会が多くなる。ここで明らかにしないといけないのは、越境民族と越境民族問題は一つ概念ではない。つまり、越境民族が存在する場合、必ず越境民族問題が生じるわけではないということである。中国も上に述べた約30の越境民族の問題が全て生じたのではないのである。越境民族問題とは、越境民族が起こした衝突、紛争のことである。越境民族は、「隣国の同胞へ対する共感や共鳴といった外部へ向けた「遠心力」（「遠心力」という表現は綾部（1998）で提起され、「求心力」と正反対である。この表現は本稿の中で、少数民族を今現在、属している集団・国から外部の集団・国へ脱出させようとする力・影響のことを表す。）と、国家の構成を担う一集団という自己定義に基づく内部へ向けた「求心力」を調節しつつ、最終的に自己の立脚する位置を見出していくことになる」。言い換えると、この「遠心力」は「求心力」より強くなった場合、少数民族が他国への移動や国家から分離する意識が強くなり、紛争が生じるのである。

1990年から2001年にかけて、テロリズム、分離主義、宗教上の急進主義という「三大

障害」を掲げるテロリストが新疆で200件以上のテロ事件を起こした。2008年の北京オリンピックが開催した日程の前後9日以内に3件のテロ事件が起きた。2012年6月、新疆ウルムチへ向かう飛行機でテロリストによるハイジャックが起きた。2014年、雲南省の昆明駅で死傷者約160人のテロ事件が起きた。これらの事件はイスラム過激派が新疆ウイグル族を利用し、中央アジアのテロリストと連携して起こした犯行である。故に、中国の越境民族問題に関する研究はとても重要である。

そこで近年中国で起きた少数民族テロリストによる事件からも見受けられるように今現在の中国では、越境民族問題が深刻化しており、本稿では中国の越境民族問題を中心として議論する。

第二章

越境民族問題になるまでに、必ずその地域内部の問題がある上で、何らかの外的要因によって扇動され、その結果、越境民族問題になってしまったのである。故に、新疆と雲南省の越境民族問題を研究する前に、まずは両地域の地域内問題について説明する必要がある。ただし、前述のように、両地域の民族構成や言語文化など客観的な要素を比較しようがなく、また、政治地位において明らかな違いがない為、地域内問題に関して本稿は主に経済問題に焦点を当てる。経済発展は国家の安定の基礎でもあり、国民の生活水準と深く関わることである。国民の生活水準は一定的な水準に達していない場合、政府や国家への不満が現れ、国家の安定性に影響を与えるのである。その為、経済問題を重視しなければいけないのである。

2.1 雲南省及び隣接国の経済状況

雲南省の国境地帯の経済状況を説明する前に、まずは雲南省の総体的経済状況を見てみる。

近年、雲南省の経済状況は徐々によくなっている。雲南省統計局の2014年経済発展報告によると、2014年雲南省のGDPは12814.59億元であり、去年より8.1%上昇した。GDPは全国の第23位になり、2013年より上昇し、2000年以降全国各省のGDPランキングで初めての上昇を実現した。また、一人当たりのGDPは27264元になり、去年より2181元高く、7.5%上昇した。

経済の発展は好調であるが、全国に比べると、やはり総体水準は低いのである。2010年のGDPは中国のGDPのわずか1.81%を占め、一人当たりのGDPは全国一人当たりでのGDPの53.1%を占める。雲南省の少数民族は全省で各所に転在しているが、相対

的に集中している少数民族地域もある。2006年、少数民族地区の一人当たりの GDP、一人当たりの地方財政収入、農民一人当たりの収入は全て2002年全国と全省に占める比率より低かった。2002年少数民族地区の一人当たりの GDP は全国より6286元少なく全省より1946元少なかった。しかし2006年になると全国より12082元少なく全省より3119元少なくなった為少数民族地区の経済発展は全国、全省との格差が拡大しつつあると考えられる。

では、雲南省と接する隣国のラオス、ベトナム、ミャンマーの経済状況はどうなのだろうか。

調査により、雲南省とベトナムの GDP は大体同じ水域になっており、ミャンマーとラオスの GDP は雲南省とベトナムより低い。また、一人当たりの GDP においては、雲南省は相対的に多い。故に、この四つの国家、地域の中で、ミャンマーとラオスは最も発展しておらず、雲南省の総体経済状況はベトナムより良いと考えられる。雲南省の国境地帯の地域の中で、ベトナム、ミャンマー、ラオスと接する市、県、また少数民族の数が多いため、より詳しく比較する必要がある、この点について後の節で説明する。

2.2 新疆及び隣接国の経済状況

2006年、新疆の GDP は3045億元になり、改革開放政策初期の1978年より15.5倍上昇し、平均年上昇率は9.92%である。また、一人当たりの GDP も1978年の313元から15000元まで上がった。2000年に「西部大開発」が実施されて以来、新疆の経済発展が明らかに増加し、地域 GDP の年上昇率は8%を超え、2003年以降は10%を超えた。新疆の経済発展につれて、住民の生活水準も徐々に良くなった。2010年新疆農民の一人当たりの収入は6442元、18.4%上昇した。1990年の一人当たりの収入の1112.01元より約5倍上がった。また、都市部住民の一人当たりの収入は18151元となり、17%上昇した。

しかし、全国に比べ、新疆の経済発展は依然として芳しくない。2000年新疆一人当たりの GDP は全国一人当たりの GDP より上回ったが、2006年になると、新疆の一人当たりの GDP は15000元になり、全国の16084元に比べ低く、全国31の省、市、自治区の中で14位になったが、新疆内部もかなりの格差があると見られる。2006年、一人当たりの GDP が最も高い地区はウルムチ市、カラマイ市、バインゴリン・モンゴル自治州であり、それぞれ28261元、96006元、33689元となっている。それに対し、最も低い地区はクズルス・キルギス自治州、カシュガル地区、ホータン地区であり、それぞれ4051元、3497元、3005元となっている。一人当たりの GDP が最も高いカラマイ市と最も低いホータン地区との差は93001元、32倍である。これは発展していない地域では工業産業がないためである。2006年、少数民族の人口比率が55%を超える地域はトルファン市、アル

タイ地区、アクス地区、イリ・カザフ自治州、クズルス・キルギス自治州、カシュガル地区、ホータン地区の七つの地区である。これらの地区の発展水準及び増加の差が1995年から2006年間に於いて大きい。70%がウイグル族を占めるトルファン市の一人当たりのGDPは新疆より高く、少数民族地域の中で最も富裕な市である。一方、カシュガル地区、ホータン地区は正反対であり、経済発展水準は最も低い。新疆全土の55%のウイグル族はカシュガル地区、ホータン地区といったあまり都市化されていない南部に集まって居住している為、社会経済発展水準は他の民族より低下しているのである。これはいわゆる新疆の「南北差」である。

また、新疆国境地帯の住民の生活水準も低下していると言われている。2003年新疆全土の一人当たりのGDPの9711元に対して、辺境地帯の一人当たりのGDPは5135元であり、全土の平均水準よりかなり低い。また、「南疆」の国境地帯の一部は2000元にも達していない為、非常に貧困状態になっている。国境地帯の大半の住民は農牧業に従事し、農業人口は全土の約69%を占める。2003年新疆全土の農村部一人当たりのGDPは2106元、辺境地帯の農村部一人当たりのGDPは2242.66元であり、全土の農村部よりわずかに136.47元高くなる為、辺境地帯の農民の収入が相対的に高いと言われる。

では、新疆と接するカザフスタン、キルギスタン、タジキスタン、トルクメニスタン、ウズベキスタンの経済状況を新疆と比較しながら見てみる。

調査により、2009年、中央アジアに比べ、新疆の土地面積とGDPはカザフスタンより低く、人口はウズベキスタンより低い。一人当たりのGDPからすれば、新疆はカザフスタン、トルクメニスタンより低く、キルギスタン、タジキスタン、ウズベキスタンより高い。要するに、中央アジア五カ国に比べ、新疆の経済発展水準は中間水準となり、カザフスタン及びトルクメニスタンより低いと伺える。

第三章

3.1 雲南省と「ゴールデントライアングル」の麻薬問題

「ゴールデントライアングル」が麻薬の世界三大麻薬産地になる原因はいろいろある。まず、ミャンマー、タイ、ラオスの三国の国境線が接し、シャン族、ワ族、ラオ族、ミャオ族、ヤオ族、カチン族、リス族、ラフ族、ハニ族、漢族などの民族が国境を越えて居住し、百万人以上の人口が居住している。その為、国家間の民族移動が頻繁的であり、住民の国家、国籍の意識が薄いのである。また、三カ国ともに多民族国家である為、国内の民族紛争が深刻であり、中央政府と長期的に対立している少数民族武装組織が存在している。その為、武装勢力は麻薬の売買と連携し、麻薬問題の取り締まりを困難にさ

せている。少数民族武装の問題は次の節で詳しく説明する。この三カ国の国内には問題と紛争が多く、「ゴールデントライアングル」の麻薬問題を対処する余裕がない。さらに、地形が原因でアクセスや、国際社会からの援助も行いづらい為、この地域の麻薬問題がより深刻になっていくのである。

雲南省と接するミャンマー北部で栽培されるケシの面積は50万畝（中国の伝統的な面積の単位で、1畝は約666.7㎡にあたる）に達し、一年間のアヘン生産量は約600トンである。ヘロインの加工場は33ヶ所あり、一年間のヘロイン生産量は約40トンである。麻薬の約50%は中国に流入している。雲南省とラオスの国境線から20キロメートル以内に、32173畝のケシ地があり、アヘンの年間生産量は30～40トンで、その中の約30%～50%が中国に流入している。また、ベトナム側でもアヘンの年間生産量は20トンあり、多くが中国に流入している。

3.2 少数民族武装問題

雲南省と接するミャンマー、ラオス、ベトナムは3カ国とも多民族国家であり、42の民族はミャンマーに、68の民族はラオスに、54の民族はベトナムに、表面上からすれば、雲南省の周辺地域に深刻な民族衝突、あるいは戦争が起きたことはないが、この地域の幾つかの民族武装組織の存在は雲南省の安定性に脅威であると考えられる。これらの組織は民族共同体である一方、長期的に中央政府と対立している地方政権である。主に雲南省と接するミャンマー北部のシャン州とカチン州に分布している。

雲南省の越境民族問題に最も直接な関係のある少数民族武装組織は、ミャンマーの「パン・カチンデベロップメントソサエティー」(Pan Kachin Development Society, PKDS)で中国語で「文蚌同盟」(ぶんぼうどうめい)と呼ばれている。この組織はアメリカ、日本、韓国、タイと香港、台湾などの国と地域に居住している「文蚌民族」が1994年6月にタイのチェンマイで立ち上げた組織である。「文蚌民族」とは、ミャンマー、インドのカチン族、チンポー族、リス族、チャン族、ヌー族などの民族の共同体であり、同盟内のすべての民族に対する呼称である。PKDSは、「これらの民族は昔から同じ民族であるが、戦争で居住地をバラバラにされ、民族の発展の弊害になった。その為、必ず団結し、他の民族の統治から独立しなければいけない。」と宣言した。PKDSはアメリカン、タイ、ミャンマー等の国で政治活動を行っていたと同時に、雲南省の国境地帯のチンポー族とリス族の居住地に宗教と文化の普及を行い、これらの民族をPKDSの構成員にすると計画していた。また、先述したように、PKDSは民族統合の大義名分から、雲南にいる何万人ものチンポー族を国境外へと移住させることがある。

3.3 東南アジアのテロ問題

公安調査庁の国際テロリズム要覧により、東南アジアにおいて多数のイスラム過激派テロ組織が存在し、その中で二つの組織は政府と和解合意が成立し、二つの組織は弱体化されていることが判明した。

東南アジアの総人口約5億5000万人のうち、イスラム教徒は、インドネシアでは1億8000万人、マレーシアでは1300万人、フィリピンでは、430万人、タイでは250万人、シンガポールでは60万人とされ、合わせて約2億1000万人がいる。

東南アジアにおいては、以前から武力闘争を行うイスラム組織の存在が注目されていたが、これらの組織の活動目的は基本的には分離独立である。しかし、2002年10月のバリ島爆弾テロ事件以後、ジェマア・イスラムアなど東南アジアに「イスラム国家」を建設することを目的としている幾つかのイスラム組織が注目され、今日現在の問題とされている。

3.4 「グランド・タイ・ナショナリズム」(Grand Thai Nationalism)の影響

「グランド・タイ・ナショナリズム」とは、20世紀前半、タイで行われたパン・ナショナリズムである。このパン・ナショナリズムは、各国にいるタイ人(タイ族)を集め、統一のタイ人国家を樹立することを目指す。「グランド・タイ・ナショナリズム」を述べる前に、まずはパン・ナショナリズムの定義を説明する。

パン・ナショナリズムは、同民族、或いは同祖先を有する民族を前提とし、言語、宗教、文化などの相似性を利用して民族の優秀さを強調し、エスニック国家の設立を迫ることを指す。「グランド・タイ・ナショナリズム」は雲南省の越境民族に大した影響を与えたことはない為、本稿では事例として挙げる。

「グランド・タイ・ナショナリズム」は「旧式」と「新式」がある。「旧式」は、タイ、ラオス、カンボジアの北西部、ベトナムの北西部、雲南省の南部及び西部、ミャンマーの中北部及び北部、インドの東北部などでタイ人が生活している地域を完全なタイ人国家として統一すると主張している。「旧式」の「グランド・タイ・ナショナリズム」は各国のタイ人がお互いを認め、認識しようとする行動であるが、国家の領土問題に関わっている為、パン・ナショナリズムとして見なされているのである。20世紀初頭、世界各地で大規模な民族主義改革が勃発し、間接的に「グランド・タイ・ナショナリズム」の展開を推進させた。1939年当時のピブーン首相は国名をサイアム(シャム)国からタイ国に変更した。また、フランスから奪われた土地を取り戻すと宣言し、タイ人の世界を

統一し、「グランド・タイ・ナショナリズム」を実施した。このような行動はカンボジア、ベトナム、ラオス、ミャンマー、中国、インドなど支援を得て、タイ国王の誕生日を祝ったり、一部政府機関をタイ国内に設置するなどの活動を行っているタイ人もいる。雲南省での一部のタイ人も「グランド・タイ・ナショナリズム」に歓迎の態度を示しているが、独立運動など過激な行動には至っていないのである。

「新式」の「グランド・タイ・ナショナリズム」は中国のチワン族の学者から提起した学説であり、「新式」は「旧式」とは関係ない。

第四章

4.1 新疆と「黄金の三日月地帯」の麻薬問題

新疆も雲南省と同じように麻薬問題に直面している。90年代以降、麻薬密輸と新疆改革開放の深刻化につれて、新疆の麻薬犯罪は急激に悪化し始めた。「黄金の三日月地帯」、特にアフガニスタン地域は世界最大のケシとアヘンの産地であり、生産された麻薬の中国への影響は深刻になっていった。

「黄金の三日月地帯」はアフガニスタン、パキスタン、イランの三カ国の境界線にあり、地域の形は三日月に似ており、利潤が高い麻薬のアヘンを大量に生産できる為、「黄金の三日月地帯」と呼ばれるわけである。70年代末、干ばつが原因で、東南アジアの「ゴールドトライアングル」のアヘンが不作になった為、闇市場のヘロインなどの麻薬の需要に供給が追いつかず、値段が急騰した。この時、「黄金の三日月地帯」のケシを植える人たちは値段高騰のチャンスを狙い、耕作地を拡大し、「ゴールドトライアングル」以来の世界有数の麻薬の重要産地になった。1981年、「黄金の三日月地帯」のアヘンの産出量は800トン以上になり、「ゴールドトライアングル」とメキシコにある「シルバートライアングル」の総生産量の二倍になった。しかし、1986年以降、「ゴールドトライアングル」のアヘン生産は活発化し、生産量も急増した為、「黄金の三日月地帯」に取って代わり、世界最大の麻薬の生産地に戻ったのである。それにもかかわらず、20世紀末、民族紛争や宗教衝突などの原因で、「黄金の三日月地帯」の麻薬経済が再興し、世界最大のアヘン類麻薬の産地になった。「黄金の三日月地帯」のケシの耕作地は約11万ヘクタールがあり、アヘンの年間生産量は3000トン～4000トンの間である。「黄金の三日月地帯」の中心地にあるアフガニスタンでは、ケシの面積が5.8万ヘクタールに達し、世界最大のケシ栽培国の一つとなっている。

4.2 パン・ナショナリズムの影響

新疆のパン・ナショナリズムと民族意識とは新疆のテロ問題と深く関わり、テロ問題が現れる一つの要因とも言える。

新疆の越境民族がパン・ナショナリズムに影響されるのは、国内の民族意識が上昇してきた為である。民族意識は社会の一つのイデオロギーとして、自民族に対する認識、文化、言語などを発展させようとする圧力が含まれるだけでなく、外部世界の自民族の歴史文化に対する認識も求められるのである。20世紀、民族意識の向上は世界的な問題である。ソ連解体、東欧革命、コソボ紛争なども民族意識の向上の結果であると言われる。

中央アジア諸国が独立した後、憲法により国家を単一主体民族に定め、特殊な地位と権利を与えた為、中央アジアの各民族の認識、或いはアイデンティティの向上に客観的な情報を提供し、主体民族と他民族の衝突を激化させるわけである。また、ソ連解体後、ソ連に属していた中央アジア諸国、例えば、カザフ族、ウズベク族、キルギス族、タジク族などの民族は自民族の国家を建設した為、新疆内に居住している越境民族の民族意識の向上に明らかな影響を与えたと考えられる。その為、新疆の越境民族の民族意識は政治化し、隣国の同胞へ対する共感や共鳴といった外部へ向けた「遠心力」が強くなり、越境民族問題をより深刻化させるのである。

民族意識の向上につれて、パン・ナショナリズムが現れた。新疆に影響を与えるパン・ナショナリズムは幾つかの種類が挙げられる。

①カザフスタンナショナリズム

カザフスタンが独立した後、カザフ族の回帰構想という法規が制定された。この構想の主な目標は、世界中で生活しているカザフ族を祖国に回帰させ、また、回帰したカザフ族の生活面における保障を与える事である。カザフスタンのナショナリズムはウズベキスタンのそれと似ている点があるが、過激な点もある。例えば、国外に分散しているカザフ族の回帰を呼びかけるために、独立した後のカザフスタンは「世界カザフ人協会」、「カザフ人故郷協会」などの組織を設立した一方、世界カザフ人代表大会を開催し、テレビや新聞紙などのマスコミを通じて国外のカザフ人に呼びかけている。カザフスタン大統領も幾度も国外のカザフ人に対し故郷に回帰するように呼びかけている。このような背景の下、国外に居住する多くのカザフ人がカザフスタンに移住したが、この中には新疆と甘粛省のカザフ族が含まれている。カザフスタンがウズベキスタンと同じく、民族ナショナリズムを宣伝するのは、民族の独立、民族の価値を強調し、独立前に政治的、

経済的の束縛からの脱出が考えられる。しかし、このような国境を超える民族ナショナリズムの宣伝は、幾つかの問題がある。周辺国との政治、経済、文化と外交関係にマイナスの影響を与える。カザフスタンがカザフ人の回帰を呼びかけている間に、ウズベキスタンとの関係に影響を与えるだけでなく、中国、モンゴルとの関係も悪くさせる為、カザフstanは民族ナショナリズムを拡大させたいのかと他国に疑われ、互いに緊張関係になってしまうのである。また、カザフ人の回帰は、カザフスタン及びその周辺国の人口移動を不安定にさせ、国境地帯の情勢も不安定になるのである。さらに、このような回帰は、新疆のウイグル族など他の少数民族にとって見本のような存在である為、越境民族の外部へ向けた「遠心力」をより強くさせる可能性が高い。

②汎テュルク主義（Pan-Turkism）と汎イスラム主義（Pan-Islamism）

汎テュルク主義と汎イスラム主義は「双子」であり、中央アジアに生まれ、その後周辺国に拡散していき、中国の北西辺境地帯の社会安定及び安全保障に多大な危害を与えた。汎イスラム主義はイスラム教を振興させ、イスラームを復興させ、世界への影響力を拡大させ、統一的イスラム国を建設することである。汎テュルク主義とは、テュルク諸語を話す全ての民族（トルコ、イラン、アフガニスタン、ロシア、中国、中央アジア諸国などの地域内にテュルク諸語を話す民族が含まれる）を集め、「グランド・トルキスタン」を建設することを目指す極端なナショナリズムであり、汎テュルク主義は主に中央アジア諸国の独立を利用して政治上に投影させる。歴史上の中央アジア諸国共々、「テュルク化」されることを経験させ、そしてイスラム教を信奉する。中央アジア諸国が独立した後、新国家で現れた様々な問題が存在し、また、イスラム教徒が多くいる為、汎テュルク主義と汎イスラム主義はこの地域から拡散され、そして統一化されたのである。無論、汎テュルク主義は中央アジアに「テュルクブーム」を引き起こすと同時に、新疆など中国北西部の民族分離主義者もこれを利用し、ウイグル族などの少数民族を扇動し、一連のテロ事件を引き起こしたのである。前述した「三大障害」もこの汎テュルク主義と汎イスラム主義を基礎思想としている。その後、テロ組織、東トルキスタン・イスラム運動が現れた。このテロ組織が掲げている「東トルキスタン主義」とは、「三大障害」が融合して変化した思想である。この思想は、テュルク系民族、イスラム教を信奉する民族と他民族の間に対立を作り、新疆で「東トルキスタン・イスラム共和国」を建設しようとしている。このように、新疆のテロ組織、東トルキスタン・イスラム運動が現れた。「三大障害」、そしてこのテロ組織と越境民族問題の関連性は次の節で詳しく説明する。

4.3 中央アジアのテロ問題

中央アジアはテロ問題が深刻な中東地域と隣接し、特に影響されている。公安調査庁の国際テロリズム要覧を見てみると、中央アジアのテロ組織は東南アジアのより数が少ないにも係わらず、その深刻さは軽視できない。ロシアの一部は新疆と接する為、中央アジアのイスラム国家建設を目指すテロ組織をまとめる際に、ロシアのテロ組織も含めてまとめた。

新疆の越境民族問題を不安定化させた一つの重要な要因は、地域内にテロ組織、東トルキスタン・イスラム運動が存在している為である。このテロ組織は「三大障害」の産物であると言われるゆえんには「三大障害」とは何かについて説明する必要があるであろう。

いわゆる「三大障害」とは、テロリズム、分離主義、宗教上の急進主義のことである。21世紀に入って以来、「三大障害」の勢力は中央アジアで続々と拡大し、中国の北西部の安全保障に脅威を与えている。テロリズムの定義は既に第四章で説明した為、ここでは割愛する。宗教上の急進主義は一般的な宗教ではなく、宗教の名義の下、暴力恐怖活動を通じてその政治目的を実現する為の極派勢力である。民族分離主義とは、独立主権国家内部で、非主体民族または少数民族の中の極端な民族主義者が、内部の民族問題と外部の勢力を利用し、独立民族国家の建設を目的としている。民族分離主義は、曲解されている民族自決を自論にし、「一つの民族、一つの国家」という理念に基づいてパン・ナショナリズムを掲げ関連する国々の領土に脅威を与える。民族分離主義は民族主義の極端化されたものであり、テロリズムを生み出す要因である。また、宗教上の急進主義は他の集団への排斥や憎しみを生み出す為、恐怖と暴力を利用して目的を達成させることになりがちである。故に、分離主義、宗教上の急進主義はテロリズムと密接な関係があり、また、この三つの勢力も常に互いに利用し、影響させるのである。東トルキスタンは「三大障害」が融合した典型例である。1990年から2001年にかけて、国境内外の東トルキスタンテロ組織は新疆で少なくとも200件のテロ事件を起こし、162人が死亡し、約440人がけがした。さらに、近年、東トルキスタンは国外の他のテロ組織と連携し、また、ISILに参加しに行く新疆の若者も少ない。

第五章 越境民族問題において、なぜ新疆は雲南省より不安定なのか

5.1 内部原因（経済格差）

中国の沿岸地域に比べ、雲南省の経済状況は新疆と同様に相対的に低下している。両地域の GDP の差はそこまで大きくなく、国境地帯に関しては、貧困状態の地区も少なくない。しかし、両地域の経済状況は各々の特徴があり、これらもまさに新疆と雲南省の越境民族問題を提起する際の問題である。

雲南省の総体的経済状況は新疆より良いと考えられる。GDP が新疆より高いだけでなく、漢族とウイグル族のような「南北差」が存在していない。雲南省の少数民族は特定の地域に集まって居住しておらず、漢族に紛れバラバラに分布している為、特に漢族に孤立され、経済的差別をされている実感が湧かないであろう。国境地帯は経済中心より発展していないにもかかわらず、少数民族だけでなく、漢族も国境地帯で居住している為、少数民族と共に経済問題に直面している。第二章の表5と表9からすれば、雲南省の一人当たりの GDP は新疆より低いと見受けられるが、両地域の人口において差がある為である。国家统计局の2014年国勢調査によると、雲南省の総人口4714万人に対し、新疆の総人口は2298万人である為、総合計では両地域の一人当たりの GDP はほぼ同じほどともいえる。一方、新疆では深刻な「南北差」があり、最も豊かな地域と貧困な地域の格差はとても大きい。漢族は故意に少数民族、特にウイグル族を孤立させようとするのではなく、約55%のウイグル族は発展していない南部に集まって居住し、言語、文化などの原因も加えて、北部の漢族及び他の少数民族との差が広がってしまったのである。結果、ウイグル族は自分たちの土地や就職の機会が漢族に奪われ、貧乏な生活を強いられると思いがちである為、漢族に対する不満も募っていくのではないかと考えられる。

前述でも言及したように、雲南省と新疆の国境地帯では、少数民族は隣接国へ移住したりしていることがあり、住民にとっての生活水準の上昇が一番重要だと考えられる為、両地域の少数民族の移住に関しては、まず念頭に置くべきは、経済問題である。

雲南省は新疆に比べ、大規模な少数民族移動がないにもかかわらず、そういった現象の存在が否めない。その主な原因はまさに少数民族の生活水準と関わっている。

2007年、雲南省側のベトナムと接する地域の中で、文山という箇所以外、一人当たりの GDP は基本的に1000ドルを超えている。それに対し、ベトナム側のランソンという地域は経済が発展しているが、他の地域の経済水準は全国より低い。故に、雲南省と接するベトナム側の地域に比べ、雲南省側の地域の経済状況は相対的に発展していると考

えられる。

ラオスと接する地域に関しては、2007年では雲南省の普洱市、シーサンパンナ・タイ族自治州のGDPがそれぞれ20.72億ドル、14.93億ドルであり、一人当たりのGDPは841.3ドル、1408ドルである。それに比べ、雲南省と接するラオスの3つの地区は、一人当たりのGDPであろうと、全て雲南省のGDPより下回る水準となっている。

また、雲南省と接するミャンマーのカチン州、シャン州も雲南省の国境地帯の経済水準よりかなり低い。雲南省の国境地帯の総体的経済水準は雲南省と接するベトナム、ミャンマー、ラオスより高いと考えられる。しかし、なぜ雲南省の少数民族が国境外へ移住するのか。それは、前述の国に比べ、雲南省の国境地帯の自然条件が悪く、ベトナム、ミャンマーなどの国は国境地帯で特殊な政策を実施し、雲南省側の少数民族の生活にとっては有利である為と考えられる。自然環境が原因で、雲南省の国境地帯では土地や生活資源が欠乏し、住民が劣悪な環境で生活している。それに対し、ミャンマー、ベトナムの国境地帯は土地が肥沃であり、自然環境も雲南省側より良い。さらに、経済発展していない為、競争が激しくなく、生活しやすいと考えられる。故に、国境外へ行って生計を立てる雲南省の少数民族は少なくない。また、ベトナムなどの国の国境地帯における政策がそういった移動を推進させている。少数民族の動乱が発生したベトナムでは、民族問題が中国より重視されていると言われる。例えば、ベトナムは2001年から国境線から5キロ以内離れる辺境地帯の住民に対し、中学校以下の児童の学費を免除し、大学に行く学生に補助金を出す。また、医療費を70%免除し、一部の税も免除される。さらに、居住するベトナム住民に一人当たり3000人民元相当の補助金を援助する。それ以外にもいろいろ優遇政策があり、雲南省の国境地帯の住民にとっては大きな魅力である。雲南省の一人当たりのGDPはベトナム、ラオス、ミャンマーより高いにも係わらず、国境地帯の生活環境が悪く、他国より悪い。そうすると、自らの利益や生活を考えた結果、国境外へ移動する少数民族の心理も理解できないわけではない。

一方、カザフ族の経済状況は新疆より良いという点を考えてみると、新疆のカザフ族の大規模での移動も予想できると考えられる。

雲南省は特に国境地帯の経済状況は楽観視できないにもかかわらず、少数民族と漢族の格差は新疆との差より小さい為、漢族との紛争は少なく、相対的に安定している。ただし、辺境地帯の劣悪な自然環境から、雲南省の国境地帯では国境外へ移住する少数民族もいる。大規模ではない為、このような移住は雲南省の総体的安定性に大きな影響を与えないが、国境地帯の経済を改善させ、住民の流出を引き止める必要があるであろう。一方、新疆内部の少数民族と漢族の格差は雲南省より激しく、特に「南北差」がある為、ウイグル族などの少数民族の不満が現れがちである。また、新疆より発展しているカザ

フスタンの呼び掛けによって、カザフスタンへ移動したカザフ族はとても多く、人材の流出などの問題が起きると考えられる。しかし、カザフ族の移動、また、ウイグル族の動乱は雲南省の越境民族のように経済だけで考えているのではなく、他にも原因がある為、次の節でその原因について検討する。

5.2 外部原因

5.2.1 国境内外のテロと緊密に連携している新疆

越境民族問題において新疆と雲南省の最大の違いを述べたが、新疆に比べ雲南省は東南アジアのテロ組織から受けた影響は少ないということである。

東南アジアのイスラムテロ組織は確かに多いが、雲南省と接するベトナム、ラオス、ミャンマーという三カ国の国内にはイスラム過激派テロ組織は多くないと考えられる。また、多数のテロ組織の中で、弱体化または所在国の政府と和解したテロ組織もいくつか存在している。それに対し、新疆の地域内にはテロ組織があるのみならず、新疆と接するカザフスタン、ウズベキスタンの国内にも危険なイスラム過激派テロ組織が存在している為、テロリズムに影響されやすいのである。

近年のテロ組織の活動を見てみると、イスラム過激派によるテロ事件は圧倒的に多いと見られる。2014年、雲南省では宗教を信奉する人が約425.57万人、その中で仏教は282.46万人、イスラム教は64万人、キリスト教は58.52人、道教は16.31万人、カトリック教は4.28万人いる。つまり、約66%の人は仏教徒であり、15%の人はイスラム教徒である。また、雲南省と接する三カ国の中で、ラオスとミャンマーの国教は仏教であり、特にミャンマーでは約90%の人が仏教を信奉する。ベトナムの国教は仏教ではないが、仏教に深く影響され、大部分の人が仏教を信奉する。一方、新疆では半分以上の人がムスリムであり、その中で「新疆」のムスリムは90%を占める。中国のイスラム教を信奉する10の少数民族、つまり、ウイグル族、回族、カザフ族、キルギス族、タジク族、ウズベク族、タタール族、トンシャン族、サラール族、ボウナン族は全て新疆に存在し、そして回族以外に大半が新疆にいる。仏教、道教などほかの宗教はただ一部の民族が信奉する。また、中央アジア諸国は大半イスラム教を信奉する。

要するに、雲南省に比べ、新疆の方がイスラム教を信奉する人が多い。そうすると、新疆内のイスラム教徒は東トルキスタンなどのイスラムテロ組織に利用されやすく、国家への「求心力」も弱くなり、結局テロ組織に参加してしまうのである。

近年、ISILのテロ活動が日々深刻になっているうちに、新疆から中央アジアを通してISILに参加するイスラム教徒の数が増加した。しかし、例年新疆から外国へ密入国者が多い為、管理が厳しくなっている。また、SCOの各構成員国が反テロリズム方面

において協力し、密入国者を発見したら、すぐ追放または送還するのである。新疆からの密入国が難しくなった為、テロリストたちが雲南省から東南アジアを通して ISIL に参加する現状になった。雲南省の国境地帯の地形が複雑で管理されにくく、その上、東南アジア諸国の国内政治状況が不安定である為、テロリストの密入国に有利な条件を提供した。また、今年1月ごろ、新疆の300名ウイグル族テロリストがマレーシアを通して ISIL に合流したというニュースがあった。このようなことは雲南省の治安に一定的な影響を与えるが、密入国である為、東トルキスタンを宣伝し、雲南省の少数民族を組織に勧誘することは大して考えられない。故に、国境内外のテロと緊密に連携している新疆に比べ、雲南省は相対的に安定しているのである。

5.2.2 パン・ナショナリズムに深く影響されている新疆

前述のように、雲南省は新疆と同じくパン・ナショナリズムに影響されている。雲南省に影響を与えているのは「グランド・タイ・ナショナリズム」である一方、新疆に影響を与えているのはカザフスタンナショナリズム、汎テュルク主義と汎イスラム主義である。

パン・ナショナリズムは越境民族のアイデンティティと国家認識に影響を与えている。言い換えれば、隣国同胞という外部へ向けた「遠心力」と、国家という内部へ向けた「求心力」のバランスに影響を与え、重視しなければ民族分離やテロなどのことが起きる可能性がある。

新疆に影響を与えているパン・ナショナリズムは雲南省より多く、その中で最も深刻なのは汎テュルク主義と汎イスラム主義である。汎テュルク主義と汎イスラム主義は「三大障害」の基礎思想である為である。中央アジア諸国が独立した後、最大限に各主体民族の支持を得るために、民族アイデンティティを強調し、民族ナショナリズムがより強調させられたのである。このような背景の下で、新疆内の越境民族が影響を受け、自民族を主体民族としての中央アジア諸国へ移住させてきた。主体が新疆内にある一部のウイグル族はこのような刺激を受け、他の民族のように自民族の国家を建設しようとするのである。さらに、汎テュルク主義と汎イスラム主義が広がっているうちに、「三大障害」が派生し、東トルキスタンのようなテロ組織が現れたのである。汎テュルク主義と汎イスラム主義の弊害について第五章で既に説明した為、ここでもう一つの問題を研究していきたい。汎テュルク主義と汎イスラム主義以外に、カザフ族はカザフスタンナショナリズムにも影響されているが、なぜウイグル族のようにテロ事件を起こしていないのか。という事である。

アンケートによると、大半の人は国家認識が強いのである。また、自分のことを中華

民族の一員として思っている人も少なくない。しかし、国家認識が強いにもかかわらず、カザフスタンへ移住したい人が多い。原因としては雲南省と似ているところがある。つまり、越境しているカザフ族にとって、移住した方が自分自身の発展に有利だからである。ただし、雲南省の越境民族と違い、カザフ族のアイデンティティも強い。カザフスタンナショナリズムはカザフスタンの良さを宣伝し、全世界のカザフ族の回帰を呼びかける。このような影響を受け、カザフ族を主体民族としてカザフスタンに行けばより重視され、言語、文化などが通じるから生活しやすいと思っているカザフ族が多くなり、さらに、調査によると、最近カザフスタンの親族を訪ね、カザフスタンのラジオや番組を視聴するカザフ族も増えているのである。その結果、国家認識が強いにもかかわらず、パン・ナショナリズムの影響で、カザフスタンでより生活しやすいと思っているカザフ族は自分または家族の繁栄の為に、カザフスタンへ回帰しているのである。つまり、雲南省の越境民族と違い、カザフ族の移住は経済的理由だけでなく、自らの文化に認識し、民族アイデンティティ水準にも達しているということである。このような移住も雲南省の場合と同じく地域の安定性に影響を与え、また、新疆は元々発達していないのに、多くのカザフ族が失われたら、人材流失がひどくなり、新疆の発展にも不利である。さらに、汎テュルク主義と汎イスラム主義に利用されやすく、新疆の安定性を悪化させる可能性がある。

第六章 結論

本稿は主に雲南省と新疆を対象とし、越境民族問題における安定性の差を検討した。雲南省は新疆と同じように多民族地域であり、中国の辺境地帯にある地域である。両地域ともに越境民族問題に直面しているにも係わらず、雲南省に比べ、新疆の方が不安定である。越境民族は、同胞へ対する共感という外部へ向けた「遠心力」と、国家の一員として認識するという内部へ向けた「求心力」を調整しつつ、自己の立場を見出していくことになる。「遠心力」と「求心力」のバランスが崩れ、「遠心力」が「求心力」より強くなった場合、外国への脱出や自国からの分離といった問題が発生し、国家の安定性に影響を与えるのである。このような問題はまさに多民族の国境地帯で起きている越境民族問題である。

今までの雲南省や新疆の民族問題に対する研究は、地域内部の問題に焦点を当てる事であった。つまり、少数民族と漢族の政治的経済格差、文化的相違などについてである。無論、越境民族問題を研究する際に、こういった地域内部の問題も考えなければならないが、地域内部の民族問題から越境民族問題に至るまでは長い過程がある。

簡単に言えば、最初は、地域内部で少数民族と漢族の間に格差の問題が発生した。この際、政府は民族優遇政策を実施し、民族の衝突は地域の内部に抑えようと考えていた。しかし、実際に効果がありにも理想的ではなく、少数民族の不満が徐々に増えていき、「爆発の臨界点」に達しつつある。この時点で何らかの影響を受け、地域内の民族問題は結局「爆発」し、外部へ出ていくのである。故に、本稿は「内部原因」と「外来影響」を重ねて研究したのである。

まずは、越境民族問題において新疆と雲南省の最大の違いは、雲南省が受けているテロリズムの影響は新疆より相対的に少ないということである。雲南省と接するミャンマー、ラオス、ベトナムの三カ国では、仏教を信奉する人が多く、イスラム過激派テロ組織に影響されにくいのである。雲南省も同じように仏教を主体宗教としている。それに比べ、新疆であろうと、新疆と接する中央アジア諸国であろうと、大半はイスラム教を信奉するのである。それに、新疆内では東トルキスタンというテロ組織が存在している。また、近年、ISILは中央アジアを第二戦線にし、絶えず中央アジアにテロを「輸送」している。そうすると、中央アジア諸国、新疆はイスラム過激派に強く影響され、「三大障害」に利用された結果、国家への「求心力」が弱くなり、結局テロ組織に参加してしまったのである。最近、新疆ウイグル族の多数のテロリストはマレーシアを経由してISILに合流したニュースがある。雲南省は一つの経由地として影響されているが、国内外のテロと緊密に連携している新疆より、雲南省は相対的に安定していると考えられる。

新疆地域のパン・ナショナリズム問題は雲南省より深刻である。雲南省に影響を与える「グランド・タイ・ナショナリズム」の「旧式」はタイ族の文化などを宣伝し、タイ人世界を統一しようとしていた為、他国のタイ族に歓迎され、雲南省のタイ族もその呼びかけに応じていた。しかし、大規模な民族移動や独立などはなかったのである。また、「新式」の「グランド・タイ・ナショナリズム」はチワン族とタイ人の関連を宣伝しているが、事実と相違する為、雲南省の大半の少数民族はそれに応じていないのである。かつて雲南省では大量のチンポー族が国外へと移住することはあったが、それは当時、雲南省の経済発展が遅れており、ミャンマーではチンポー族の主体であった為、彼らにとってミャンマーへ移住したほうがより良い生活をしやすい為である。その後、雲南省の経済が回復し、もともと中国籍の少数民族だけでなく、外国籍の少数民族も雲南省へ移住しに来たことがある。それに比べ、新疆のウイグル族は汎テュルク主義、汎イスラム主義に影響され、「三大障害」が生じ、テロ組織と連携して国から分離しようとしている。また、カザフスタンはカザフスタンナショナリズムに影響され、カザフ族を主体とするカザフスタンへ回帰する人がたくさんいると見られる。新疆でより生活がしやす

いと思う人でもカザフスタンへ移住したりしている。チンポー族やカザフ族のように国外へ移住することは、必ずテロなど深刻な問題を導くわけではないが、人員の移動が頻繁しているため、国境地帯の不安定や人材流失などの影響をもたらす可能性も含んでいるのである。しかし、ウイグル族の主体は新疆内にあり、中央アジア諸国へ移住してもあまりにも重視はされない。また、他のテュルク諸語を話す中央アジア諸国は次々と自民族の国を建設した。それを見たウイグル族は、不公平を感じ、パン・ナショナリズムの影響を受けて、中央アジアへ移住するのではなく、新疆から分離しようとするようになった。故に、雲南省の越境民族は海外へ移住することはあるが、大半の原因は経済問題であり、その後雲南省へ戻ってきた場合も少なくない為、民族アイデンティティの水準に達していない。一方、新疆のウイグル族であろうと、カザフ族であろうと、どちらもパン・ナショナリズムという外部要素に影響され、「外」へ向けた「遠心力」が強くなった為、国内の民族問題が越境民族問題に至ったのである。

最後、少数武装民族問題は雲南省に一定的な影響を与えるが、近年、それらの少数武装民族の中で、政府と停戦合意を達成した民族はたくさんあり、残りの武装も徐々に弱体化していると見なされる。また、雲南省の少数民族は紛争地へ移住することがほぼ考えられない。それも雲南省の越境民族は新疆より安定している一つの原因であろう。ただし、雲南省の少数民族の「遠心力」を強くさせることができないにもかかわらず、少数武装民族は依然として存在し、国境地帯の治安を脅かしている為、軽視することができないのである。麻薬問題に関しては、近年、「黄金の三日月地帯」の状況は「ゴールドトライアングル」より深刻になっているが、その違いはほぼ見られない。故に、麻薬問題は両地域ともに存在しており、越境民族の安定性の差を大きくさせているとは言えない為、比較しようがない。ただし、テロリストは麻薬を売買し、そこから得た金銭がテロ活動の資金となっている為、麻薬問題はテロ問題を深刻化させていると考えられる。

参考文献

- 【1】小池誠（2000）「民族問題試論－民族とは何か、なぜ民族は対立するのか？－」、『国際文化論集』, 21, pp.293-321
- 【2】小西中和（1996）「ジョン・デューイのナショナリズム論：多民族社会と国民国家」、『滋賀大学経済学部研究年報』, 3, pp.17-37
- 【3】小嶋祐輔（2010）「中国における違いの政治と民主主義－新疆「民族問題」の経験が示唆するもの」, 『ICCS Journal of Modern Chinese Studies』, 2(1), pp.229-238
- 【4】中村則弘（1993）「中国の社会変動と少数民族アイデンティティ」, 『帯広畜産大学学術研究報告・人文社会科学論集』, 8(4), pp. 293-309
- 【5】長谷川清（1998）「国境を越えるネットワークとエスニシティの動態：雲南省・シブソーンパンナー、タイ・ルーの事例から」, 『東南アジア研究』, 35(4), pp. 620-643

- 【6】綾部真雄（1998）「国境と少数民族：タイ北部リス族における移住と国境認識」、『東南アジア研究』, 35(4), pp. 777-802
- 【7】王柯（1999）「研究会報告「21世紀シルクロード研究会」(1)：新疆の政治・経済と民族問題の現状」、『中国研究月報』, 53(10), pp.28-51
- 【8】チョン, アジム（2007）「中国新疆ウイグル自治区の中央アジア諸国に対する対外貿易について」、『熊本大学社会文化研究』, 5, pp.173-192
- 【9】遠藤聡（2006）「東南アジアとテロリズム対策－シンガポールとフィリピンを中心に（特集テロリズム対策）」, 外国の立法 (228), pp.175-193
- 【10】島村智子（2006）「上海協力機構（SCO）創設の経緯と課題」, 『レファレンス』, 671, pp.45-58
- 【11】刘稚, 申旭论（1989）「云南跨境民族研究」（訳：雲南の越境民族研究）, 『云南社会科学』, 1989年第1期, pp.76-81
- 【12】罗兆均（2015）「云南跨境民族宗教渗透问题及对策研究 - 基于构建和谐边疆的视角」（訳：雲南越境民族宗教の浸透問題及び対策研究－平和な国境地帯を構築する視点に基づき）, 『青海民族大学学报』, 2015年第1期, pp.59-64
- 【13】毛欣娟（2006）「跨界民族问题与新疆社会稳定」（訳：越境民族問題と新疆の社会安定）, 『中国人民公安大学学报（社会科学版）』, 2006年第2期, pp.106-110
- 【14】丁建伟（2004）「中亚与我国西北边疆地区同源跨国民族问题」（訳：中央アジアと我が国北西国境地帯の越境民族問題）, 『西北第二民族学院学报』, 2004年第1期, pp.5-11
- 【15】李正元（2011）「非传统安全视角下的新疆跨国民族问题」（訳：非伝統的な安全保障視点の下の新疆越境民族問題）, 『塔里木大学学报』, 2011年6月第23卷第2期, pp.37-43
- 【16】艾莱提・托洪巴依（2011）「新疆跨界民族问题研究」（訳：新疆越境民族問題の研究）, 『实事求是』, 2011年第2期, pp.86-90
- 【17】方铁（2007）「云南跨境民族的分布, 来源及其特点」（訳：雲南越境民族の分布, 由来及び特徴）, 『广西民族大学学报（哲学社会科学版）』, 2007年第29卷第5期, pp.9-20
- 【18】胡起望（1992）「跨境民族初探」（訳：越境民族初討議）, 『金沢大学文学部論集』, 行動科学科篇12, pp. 107-129
- 【19】王建娥, 陈建樾（2004）『族际政治与現代民族国家』（訳：民族果て政治及び現代民族国家）, 社会科学文献出版社, pp.264-265
- 【20】张兴堂（2009）『跨界民族与我国周边外交』（訳：越境民族と我が国の周辺外交）, 中央民族大学出版社, pp.18-21, 67-81, 89-104, 119-132
- 【21】李立纲（2003）「云南跨境民族的民族身份与国家认同实证研究－中越, 中老, 中緬边境的调查分析」（訳：雲南越境民族の民族アイデンティティと国家認識の研究－中国とベトナム, ラオス, ミャンマーの辺境地帯の調査分析）, 『西部学刊』, 2013年11期, pp.61-60
- 【22】罗秉, 森莫, 关耀, 杨斌, 李春, 张斌（2002）「云南跨境民族问题与国家安全研究」（訳：雲南の越境民族問題と国家安全研究）, 『云南公安高等专科学校校报』, 2002年4期, pp.78-84
- 【23】李建新（2008）「新疆社会经济的区域发展差距分析」（訳：新疆社会経済的地域発展の差的分析）, 『西北民族研究』, 2008年第2期, pp.45-95